

日本人の心の歴史

上

唐木順三



筑摩叢書 229

筑摩叢書 229

日本人の心の歴史
上

唐木順三



筑摩書房

唐木順三 (からき じゅんぞう)

1904年 長野縣に生まれる

1927年 京都大學哲學科卒業

評論家

著 書 『鷗外の精神』、『中世の文學』、『千
利休』、『無用者の系譜』、『無常』、
『三木清』、『日本の心』等多數。
『唐木順三全集』全 12 卷がある。

日本人の心の歴史 上

筑摩叢書 229

1976 年 3 月 25 日 初版第 1 刷發行

1979 年 3 月 10 日 初版第 2 刷發行

著 者 唐 木 順 三

發 行 者 關 根 榮 郷

發 行 所 株式 筑 摩 書 房
會社

東京都千代田區神田小川町 2 の 8

電話 東京 (291) 7651 (營業)

(294) 6711 (編集)

振 替 東 京 6—4 1 2 3

郵 便 番 號 1 0 1—9 1

©1976 Printed in Japan

精興社印刷・永興舎製本

(分類) 1021 (製品) 01229 (出版社) 4604

初版はしがき

私は長い間、明治大學の文學部で「日本文藝思想史」の講義を擔當してきた。昭和四十一年の四月からの講義には「日本人の季節感―その歴史的變遷」といふテーマを選んだ。二ヶ年連續で、現代にまで及ぶ筈であつた。ところで、その年の十一月から大學に授業料値上問題から紛争が起り、翌年の一月末まで講義は中斷し、二月、三月とかけあしの講義をして、とにかく蕪村までいった。紛争は解決し、年度内に卒業生をおくりだすことができたが、私は考へるところあつて、辭職した。そのため私の講義は一ヶ年、しかも不十分な一ヶ年で終つた。

私には、このテーマを、ともかく完成したいといふ氣持があつた。昭和四十三年の十一月であつたか、紀伊國屋ホールで行はれた筑摩書房主催の「總合大學公開講座」で二回にわたつて、このテーマで話した。それもただ要點を飛び石づたひに話したにとどまつた。

私はかねてから筑摩の「總合大學叢書」百巻のうちの一冊として、『日本精神史』を書くといふ約束をさせられてゐた。約束はしたが、さういふ大きな題目では、三年四年を費しても書けさうにない。そこで私は『日本人の心の歴史―季節美感的變遷を中心にして』をもつて、それにおき

かへることにした。『日本精神史』といふ文字から受けとるイメージと、『日本人の心の歴史』から受けとる感じとはかなりの違ひがある。精神史となづけられた從來の著書をみればわかるやうに、それは多くは概論風のものである。佛教、儒教、國學、洋學、それに文藝、藝能、書畫、それらが、歴史的に、また社會的に、或ひはまた綜合的に述べられてゐる。然し日本人の精神の展開を緻密に敘述するといふことは至難なわざといつてよい。それは一人の仕事としては不可能に近い。第一に日本人はさういふ綜合的總括的な仕事にはむいてゐない、或ひは不慣^なである。即ち過去にさういふ傳統が無い。文化史、精神史を教科書風以上のところで、大きく書きしるした業績に乏しい。津田左右吉、和辻哲郎、西田直二郎、龜井勝一郎といふやうな人々の各々個性のある仕事には敬意を表すべきだが、それで充分かといへば、さうとはいひかねるものがある。

概論的、總括的な仕事には不向^{むき}だが、日本人は他方、局部については實に精緻な、また豊かな觀察をしてゐる。また些事を大きな背景において感じ取つてゐる。國學者殊に本居宣長、民俗學者殊に柳田國男といふやうな人たちは、觀察し感受したものを、學問の方へもつてゆかうとしてゐる。學問の方へもつてゆくかゆかないかは別として、日本人は感受性においてきはだつてすぐれた民族であることはたしかである。

『日本人の心の歴史』といふときの「こころ」は、精神といふやうな、骨つばいがどこか瘦せてゐるものとは違つてゐる。こころもちはきもちに通じ、きこころなどと一般にいふ。情と書いてこころと讀ませてゐる例もある。「心なき身にもあはれは知られけり」云々といふ西行の歌など

から察しがつくやうに、「心」ととりたてていへば、なかなか概念づけることはむづかしいが、もののあはれを知る心が、心とされてゐた。即ちここは感情や氣持や情緒に深くかかはつてゐる。また「一心不亂」とか、「心もち肝要」とか、「初心忘るべからず」とかいふときの心は意志や實行にかかはつてゐる。それはいはゆる精神に近い。近いといふのは、一般に精神といふときの抽象性、或ひは形而上性がうすく、自己の今日の實踐や生活の場面で精神がとらへられてゐることを指す。

日本人が鋭敏な感受性をもつてゐると、さきにいつたが、それを最もよく示してゐるのが季節感といつてよい。我々日本人は、眼で、耳で、鼻で、また肌で、舌で、季節や季節の推移を感じる。雲の色や形で、風や雨の音で、松茸やさんまを焼くにはひで、乾いた、また濕つた空氣で、しゆんの食物で季節を感じる。「目には青葉山ほととぎす初鰯」といふ素堂の句が代表的に示してゐるやうに、五官を通してその折々の季節を感じ取る。そしてまた、咲く花のにはふが如くといつて、時勢や人生の全盛の感情をそれに託し、落葉において凋落を、秋の夕暮において寂寞を歌つた。即ち心のほどを季節に託して表現した。萬葉集以下に「寄物陳思」（物に寄せて思ひを陳ぶ）といふ類の歌があるが、その「物」は多くは雪や月や花、花や鳥や風や月、雪月花、花鳥風月であつた。例へば萬葉集卷十に「春の相聞」といふ部立がある。その中で鶯の鳴く聲にわが戀人を思ひ、「卯の花くたし」や、藤波、また霜や霞に、わが戀のくさぐさを託してゐる。即ち、

思ひも戀も、自然の景物、季節季節の風物において、またそれを通じて歌はれてゐるのである。別にいへば、心が季節の景物において、景物が心において歌はれてゐる。だから季節の感じ方、景物の選び方の歴史を辿れば、心の歴史の、少くとも一面を明らかにすることが出来るわけである。

日本人がなぜ季節の變化、四季折々の風物を強く、敏く感受したか。それにはいろいろの條件が考へられる。日本の風土が、四季折々の變化を、花鳥風月、山川草木において鮮かに示してゐるといふ自然的條件がある。また日本の民族が、春、播き、秋、收めるといふ農耕の民族であつたといふ社會的條件もある。また日本がいはゆるモンスーン地帯に屬してゐて、自然の氣象から恩恵と同時に損害をつねにうけて來たといふ地理的歴史的條件もあらう。さらには季節への感受性のほどを美しく示してゐる歌集、古今集以下の八代集が勅撰であつたこと、後代がそれを學び、まねぶことをもつて雅としたといふ文化的條件も考へられる。以上のやうなさまざまな條件が、日本人の季節への鋭敏な感受性をつちかつてきた。然しさういふ諸條件をいかほど分析的に、合理的に説明しえたとしても、季節美感を説明しえたとはいへない。むしろ合理的分析的に説明してしまへば、はかなく消えてしまふやうな、そこはかとなない氣分、氣持、こころ、感情の中に、日本人の季節美感、日本語でしか示しえない美しく微かな美感がある。「草臥て宿かる比や藤の花」「行春や鳥啼魚の目は泪」、その他どれでもよい、芭蕉の句は、そこはかとなない氣分をそのま

まに同感するより外にいやうなものである。

ところで季節についての嗜好は一定してゐない。嗜好とか趣味は原初的には味覺についてのすきこのみであつて、これは人々によつて違ふ。甘黨あり辛黨あり、千差萬別といつてよい。季節についても同様で、春と秋と、いづれがよきかといふ、いはゆる春秋優劣論は萬葉の額田王から始まつてゐる。各人各様の嗜好、ひいては季節感覺をもちながら、一つの時代にほぼ共通した、共通とはいへないとしても、時代の平均的な好みがみられる。萬葉集では梅が、古今集では櫻が多くうたはれてゐるといふやうなこともその一つの例である。後拾遺集において初めて「秋の夕暮」が登場し、新古今集において、その句の頻度が一段と多くなるといふこともまた一つの例である。「水ばかり艶^えなるはなし」といつた心敬が出て來たことによつて示されるやうに、中世において冬の美が初めて自覺的になつたといふこともその例である。そして、さういふ時代の平均的嗜好の變遷、季節感の歴史的變遷の背後には、その時代の歴史的品格がある。政治や社會、文化や學問の歴史的推移が、おのづからにその時代の季節感にも反映してゐるわけである。

季節に對する嗜好は個人の性格の反映であると同時に、時代の性格の反映である。然しその反映のほどを精確にしらべて記述することは非常にむづかしい。むづかしいといふ理由には、それを綜合的にあつかつた前例がないといふこともある。また短い期間で、それを資料によつて檢出することが困難だといふこともある。さういふ困難を覺悟しながら、私はそれをここで試みよう

としてゐるわけである。幸ひなことに、部分的に、局部的にそれを扱つた文獻は若干ある。たとへば松田武夫氏の『古今集の構造に關する研究』の如きはすぐれた業績である。さういふ個々の文獻のたすけを借りながら、ともかく私は私の試みを、私流にすすめるより外はない。個人により、時代によつて異なる季節感覺、嗜好を記述しながら、その感覺、嗜好の背後にある時代の性格を描きだし、それによつて日本人の心の歴史を誌したい。心を感じ、感情に接近してゐる場面にとらへることによつて、抽象的概念的になりやすい、いはゆる精神史を、具象的に描いてみたいといふわけである。とにかく私はそれを試みる。

然しまた、季節感の變遷の跡を辿るだけでは「心の歴史」を總括的に述べるわけにはゆかない。各々の時代を特色づけた思想や文藝作品、また社會や政治機構の變遷の跡を、季節感から離れて敘述することも必要になるだらう。そして最後に、季節を實生活から疎外することをもつて文明と心得るに到つた現代の傾向をも書くことになるだらう。

卷を上下に分つて、上卷では古代から中世まで、具體的には芭蕉までを、下卷では近世から現代までを扱ふことにする。

昭和四十四年七月

唐木順三

目次

初版はしがき

序論 日本人の感受性の特色——感性の論理——……………三

一 萬葉集における「見れど飽かぬ」について……………四

二 古今集における「思ふ」について、及び王朝末、
中世初期に現はれた「心」への懷疑と否定……………五

三 「思ふ」から「見る」への回歸、及び「見る」ことの深化……………六

四 春と秋といづれまされる……………七

額田王の歌 歌合 物合 王朝の優雅

五 季節のよびよせ……………一〇

櫻狩、紅葉狩 草木を庭に移す 香を袖にうつす 草木染

草花の文様 文付核

六 四季の色どり 三〇

宇津保 源氏 枕草子

七 古今集の四季の部立及び配列の仕方の問題 三二

冬歌の少いのはなぜか 古今集巻頭歌の問題 生活の季節
から暦の季節へ

八 秋への傾斜 三三

定家の「見渡せば」の歌の真意 秋の夕暮の美學 見渡す、
詠むについて 月の世界への關心 白の美、ロマンチズム
△ 世にそむくこと 中世へ

九 冬の美の發見 三六

雪と氷 歌人の限界 道元の不染汚、大地雪漫々 餘情、
幽玄 餘白 否定の介入、死中の生 中世の一性格

一〇 冬の美 三九

世阿彌の幽玄　時分の花から眞の花へ　花から雪へ　空
から色への却來　心敬の幽玄　冷え寂び　氷ばかり艶な
るはなし

一一　否定の美學……………二〇八

一言芳談の聖たち　ただ生をいとへ　とく死なばや　死
にいそぎ　吉田兼好の生き方　亂世の賢人　存命のよろ
こび　否定による美の現出　動十分心動七分身　能面の
美　水墨の美　枯山水　石の發見　わびとわびきどり

一二　新なる季節……………二二〇

萬物みな新なり　物理的時間と歴史的時間　道元の家系
「詩歌を捨てよ」の意味　「而今の山水は古佛の道現成なり」
「徧界、曾て藏さず」　存在と時間の問題

一三　季節の實相……………二四九

大燈國師　「常に憶ふ江南三月裏」　良寛　唯聞く落葉
の頻なるを　風流の源底

一四 芭蕉の發明 二六

芭蕉の風雅、「造化に従ひ造化に歸れ」 「風情つひに菰をか

ぶる」 存在は風雅の種 俗談平話を正す 連句のおも

しろさ 付合の問題

補遺 『撰集抄』の脱體制者たち 二六

——その歴史的敘述——

日本人の心の歴史

上

季節美感の變遷を中心に

序論 日本人の感受性の特色——感性の論理——

古事記は「天地初發の時」(天地の初めて發けし時)といふ文字で始まつてゐる。天地宇宙の創造神話、創世記は、いづれの民族にもあらう。いちばん初めに何があつたか。何かの原因から起るところの結果ではない最初の原因、原因の原因のそのまた原因、第一原因は、どこからどうして出てきたか。かういふ素朴な問ひ、幼兒の問ひは、素朴なるが故にいづれの民族にもいつの時代にも起る。ヨハネ傳第一章の「太初にロゴスありき」が、ファウスト博士を悩ませ、ゲーテを苦しめ、そのロゴスとはいつたい何かをさまざまに解釋し、解釋だけでは納得できずに、自己の哲學をおしたて、「太初に行爲(Handlung)ありき」とおきかへて、漸く納得しえたといふ故事を我々は知つてゐる。心(觀念)が先か、身體(物質)が先かで、觀念論や唯物論が起つて互に争ひ、有が先か、無が先か、色か空かで論議し、それが今日にまで、さまざまに姿を變へながらつづいてゐることを我々は知つてゐる。生と死、言葉と沈黙、理論と實踐、理想と現實、個別と普遍、主體と客體、意志と環境、個人と社會、實存と體制、實にさまざまな形をとりながら、そのいづ

れが先か、「太初」「初發」に何があつたか、何がどのやうにして起つたかの問ひがくりかへされてゐる。それは鶏が先か、卵が先かといふやうな水掛論としてあいまいのうちに始末してしまふやうな大人の常識的な問題ではない。また政治や權力の介入によつて處置できる問題ではない。實に素朴な、素朴なるが故にまた原初的な問題である。

ところで古事記の「天地初發の時」はどう示されてゐるか。

「天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御產巢日神。次に神產巢日神。此の三柱の神は、並獨神と成り坐して、身を隠したまひき。」

次に國稚く浮きし脂の如くして、くらげなすただよへる時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。」

この古事記の冒頭文について胸のすくやうな解明を與へてゐるのが、『火山列島の思想』（昭和四十三年、筑摩書房）の著者益田勝實氏である。氏によれば、天之御中主の神、高御產巢日神、神產巢日の神、また天之常立神、さらに國之常立神等は抽象神だといふ。天上界の中心の主宰神や、生成力を神格化した神々、また天上や國土に永遠にいます神々といふやうな意味をその名とする抽象神は、原始社會においては、自然神や人格神よりも後の段階で出てくるものであるといふ。これらの抽象觀念をその名とする神々は、後代の挿入であらうといひ、「葦牙の如く萌えあ